



折れない心を育てるいのちの授業プロジェクト

折れない心を育てるいのちの授業プロジェクトの未来予想図をストーリー仕立てで描いてみました。

ある人口10万人の都市（高齢化率35%）。この10年で人口が2万人減り、急激に高齢化率が増えてきている。市内の学校も統廃合が進み、かつて6つあった中学校も4つに減っている。そのすべての学校で、折れない心を育てるいのちの授業が紹介されるようになった。講師は、地域で活動しているさまざまなボランティア団体の人や、現役を引退されたお父さん、そして、子育てを終えたお母さん達。少しでも社会に貢献したいという共通の理念でつながり、折れない心を育てるいのちの授業プロジェクトに参加している。

その講師の一人Aさんは、お子さんが不登校になったとき、子どもと一緒にいのちの授業をきいて心から感動した。その後、お子さんも立ち直り、今は社会人として働いている。その体験から、このテーマを伝えたいと思うようになった。ふだんは、パートで仕事をしながら、認知症サポーターとして、地域の見守りネットワークの仕事や、子育て支援のボランティアの手伝いも行っている。いのちの授業の講師を目指して、動画を繰り返し視聴し、パワポ資料で繰り返し音読し、先輩の講師の授業をみながら、何回か模擬練習を行った。小人数で実施をして自信をつけてから、実際に学校で授業の機会を得た。1対1の対応、聴くこと大切さについて、生徒から質問が来たときの対応に自信がなかった。

そのため、定期的に近くのB市（人口50万人）で開催される、エンドオブライフ・ケア協会認定ファシリテーター主催の、いのちの授業講師向け研修会に参加した。実際に模擬患者になったり、聴き役になったりするロールプレイを体験でき、自信を持って、話を聴くことの大切さが伝えることができるようになった。その体験からも、ふだんの地域の見守りでの活動や、子育て支援のボランティアでの活動に、より自信を持って活動できるようになった。最近では、授業に行った学校の生徒さんが、課外活動の一環として、子育て支援のボランティアに参加してくれるようになった。

「折れない心を育てるいのちの授業プロジェクト」に参加するようになって、一緒に講師をする他団体の人たちとの交流も盛んになった。講師同士の意見交換の場では、苦しむ人への援助と5つの課題が、どの活動でも共通であることが話題となる。人口が少なくなり、地域で支援にあたる担い手も少なくなる中で、支援にあたる諸団体が、共通の言葉で援助を行うことができることで、職種を越えて連帯感が強まっていくことを実感できている。

小澤竹俊

全国研修会開催報告

「折れない心を育てるいのちの授業プロジェクト」として、講師育成のための1日研修会が8月11日に上大岡で開催されました。全国から140名近い参加者があり、20のグループに分かれ、テーブルファシリテーターとともに模擬授業を聴いた後、プレゼンテーションの練習をしました。赤鼻先生としてご高名な副島先生にも特別講義をいただきました。これから全国で認定講師が「いのちの授業」を展開する時代がやってきます。



新刊の紹介



折れない心を育てるいのちの授業プロジェクト（OKプロジェクト）を開始するにあたり、新刊「折れない心を育てるいのちの授業」（角川書店）が、いよいよ出版となります。是非、ご一読ください。

診療実績

	2006-	2019年					総計
	2018年	1月-4月	5月	6月	7月	計	
訪問回数	70,753	3,338	981	913	904	6,136	76,889
自宅永眠	2,252	85	21	24	15	145	2,397
施設永眠	349	21	9	7	5	42	391
在宅 (自宅+施設)	2,601	106	30	31	20	187	2,788
病院永眠	711	34	1	9	5	49	760